

編集後記

『親鸞教学』第七六号をお届けします。発刊が遅れましたことをお詫び申し上げます。

加来助教の論文は「絶望に立つ教え」と題されています。『親経』下下品の文を通して、人間の限界状況において選びを決定させる呼びかけとしての教えについて述べ、自己のどのような状況においても宗となる教えについて論じておられます。

三木助手からは、「親鸞における教学の視座」と題する論文を寄せていただきました。まず『教行信証』の「標拳」と「標列」に注目して、親鸞における教学の課題が指向する方向性について考察され、次に「後序」の文によって親鸞の教学の方向性と帰着点を決定していく基点を尋ねようとされています。

田村晃徳特別研修員は、浄土教の枠を超えた仏教の再興者として清沢滴之先生を了解する、西谷啓治先生の清沢滴之観について述べておられます。

元大谷大学非常勤講師の籠弘信氏は、第七五号に引き続き、親鸞三十三歳時

の改名について論考を寄稿して下さいました。

二〇〇一年に、大谷大学は近代化百周年を迎えます。百年前の一九〇一年十月十三日に大谷大学は再出発しました。その再出発する大学の特質について、初代学長清沢滴之先生は、「我々に於いて最大事件なる自己の信念の確立の上に、其の信仰を他に伝える、即ち自信教人信の誠を尽すべき人物を養成するのが、本学の特質であります。」と述べられました。

「自己の信念の確立」とは、自分自身が道を求め、信念を確立しなければならぬのだということと呼びかけるものです。このように呼びかける清沢先生に接することによって、自分自身が求道すべきであることに、多くの人があらためて気付かされたのでした。なぜなら「当時は大乘小乗の研究は随分熱心に行われたに拘わらず、自分の信仰とは殆んど無関係で、僧侶と云えば法を説くものにして求めるものでないかの如く思われた。」という状況があったからです。そしてそこにおいては、信仰についてどのように研究するかとか、どのように説明するかというような関心ばかりがあったのであ

り、自己の求道・信念の確立に目が向けられるということは少なかったのです。そのような状況の中において、自己の修養に勤められる清沢滴之先生の姿や言葉は、自身の求道・信念の確立ということの大切さをあらためて人々に気付かせたのでした。

自身の求道・信念の確立ということを欠落したまま、研究や説明にばかり心が向いている。それは決して過去の話ではなく、今現在の状況でもあるのでしよう。それ故に、清沢先生によって挙げられた、「我々に於いて最大事件なる自己の信念の確立」という言葉の重みを、今あらためて思わせられます。（藤嶽明信記）